

ポスター発表「飼育動物の死に直面して」

八木 良子



1 はじめに

学校で飼育動物を飼育し、生活科や理科、道徳と授業などで活用したり、飼育委員会を中心として、動物のお世話やふれあいの活動を取り入れたりすることは、児童の精神的発達面において大きく影響を与えることをこれまでの教員生活で実感している。

学校飼育動物たちは、「生:生まれる、生きる」「老:老いる」「病:病む」「死:死ぬ」を人間のそれより短いスパンで児童たちに見せてくれる。

その飼育動物の「生・老・病・死」に寄り添わせる活動ができれば、昨今の住宅事情では、ペットの飼育禁止の住宅も多く、家で小動物を飼ったことのない児童や、核家族化で人の老いていく姿、またはそれに続く人の死を身近に経験したことのない児童も

「老」「病」「死」について感じたり、考えたりすることができると思う。

2014年4月から2018年3月まで勤務した福岡市立飯倉中央小学校での実践を中心に報告したい。

2 学校飼育動物の死

児童たちが、学校飼育動物の世話を一生懸命していても、動物がだんだんに「古い」

「病み」弱っていくこと、または、何らかの原因で突然の「死」を迎えることは避けることができない。そんな時に、教員や大人の方が「死」を児童の視界から遠ざけるのではなく、落ち着いて事実を話し(できれば獣医師の診断を受けて)「お別れ」の場を作

ってほしい。児童が飼育動物の「死」を実感し、「生」「老」「病」の後に来る「死」を受け入れることができるようにすることが大切である。

(1) ある別れ 1 2018年6月3日

運動会の朝、学校のチャボが死んでいた。朝登校時に児童が立ち寄っている飼育舎の前の「生き物とのふれあいランド」に「お別れ」の場を作った。

動物の移動用に使うバスケットの中にチャボを入れ、児童と一緒に花を飾った。運動会当日の朝ということもあり、ポスターを書いてチャボの死をみんなに知らせたり、放送でお別れ会を知らせたりというのができなかったけれど多くの児童が足をとめてお別れをした。

ある男児は、「先生、ゴマちゃん、動かん。(動かないの)」「ゴマちゃん、生きらん。(生きてないの)」「先生、ゴマちゃん、死んだ。(死んだの)」と聞いてきた。



お別れ なかなか離れない3年生

この学校は、飼育動物を授業で活用する他、飼育委員会が中心となって、休み時間に飼育動物たちをふれあいランド(飼育動物運動用スペース)で遊ばせ、児童にも多く触れ合う機会を設ける活動(以下、ふれあい活動という)をしてきた。



低学年の児童に死について教える3年生



ふれあい活動：下級生にチャボの抱き方を教える飼育委員



ふれあい活動：うみたての卵にふれて

ふれあい活動などを通して、老衰でだんだん弱ってきていたチャボを見て4月、5月過ぎだったので児童たちは、チャボが元気たくさんたまごを生んだこと、生活科の授業で抱いた時の感触や聴診器で聞いた心音の

こと、そんな数々の思い出を口にして別れを告げていた。

(2) ある別れ2 2018年3月7日

この学校に赴任してきた2015年の春、飼育舎のチャボは8羽いた。生育歴を記した記録等がないので正確にはわからないが、卒業生の話などからいずれも7歳以上だと思われた。私が、在任4年目に入る頃、10歳を超えたチャボがだんだんと死んでいった。



お別れ 休み時間にお別れを言うためにたくさんの児童が列に並んだ



お別れ：飼育委員会の児童がきれいに花で飾って

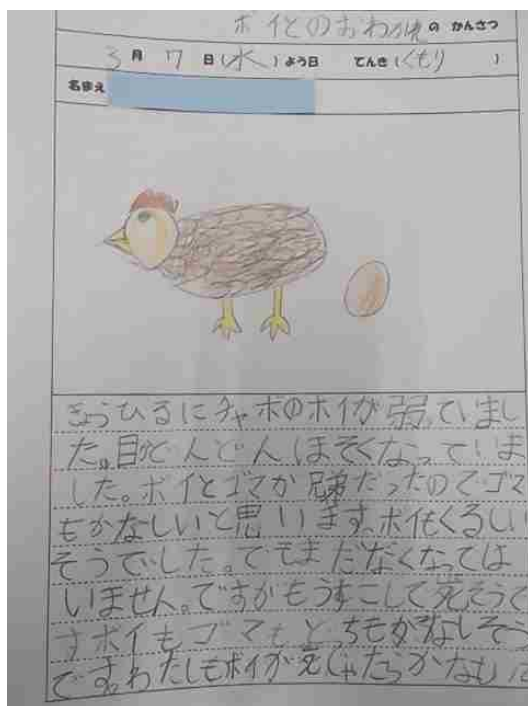
飼育委員の中には、自分たちの世話が十分でなかったのではないかと、他の児童とのふれあい活動を頻繁に設けたのが動物への過剰なストレスとなり命を縮めたのではないかと思ひ悩む委員もいた。そして、ふれあい活動をなくしたほうがよいのではないかと、いやみんなが動物と仲良くなったほうがよいので続けたほうがよいのではないかと委員会の中で議論になったこともあった。

そんな時、かかりつけの獣医さんが「老衰によるもので、みんなのお世話が足りなかったせいではないよ。」「ふれあい活動については、チャボやウサギに負担が多くなならない程度に続けていったほうが動物も楽しそうだね。」とおっしゃってくださったことを伝えたことで委員会の話し合いがより深まったことがあった。そのことにより単に自分たちの都合を優先させてふれあい活動の日時を決めたり、がんばりすぎて動物にむやみにストレスをかけたりすることがないように考えることができるようになった。獣医師の診断、客観的な説明は児童たちが考えて判断するために大切なことであると考え。

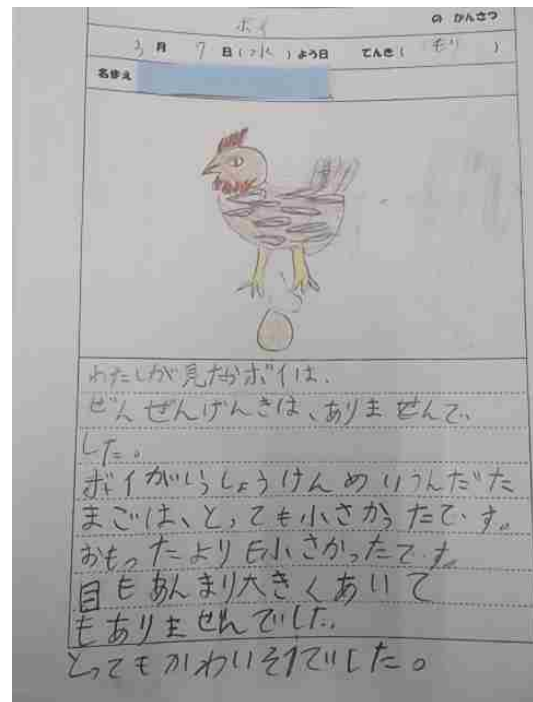
1年生から6年生まで、心身の発達段階も飼育動物への理解も死の受け止め方も様々ではあるが「生・老・病・死」の最後を考える場「お別れ」の場を設けることができたのは良かったと思う。

3 児童の表現物に見る児童の「老」「死」に対する感想

2018年3月7日、チャボのボーが死んだ。だんだんに弱っていくボーについて、3年生が書いた観察記録を紹介したい。



カード①：ボーの様子を見つめて記録



カード②：ボーの様子を見つめて記録

児童たちは、ふれあい活動で元気に動き回っていた時のチャボの様子と全く違うことから「死」が遠くないことを感じているのがわかる。

「きょう、ひるにチャボのボーが弱っていました。目がどんどんほそくなっていました。ボーもくるしそうでした。でも、まだなくなてはいません。ですが、もう少しで死にそうです。」「ボーもゴマもどっちもかなしいです。わたしも、ボーが死んじゃったら悲しいです。」「ボー、いつも元気でいてくれてありがとう。いつもみんなを楽しませてくれてありがとう。」「今日、ボーが弱りはてていました。いままでボーにお世話になりました。ボー、いままでありがとう。」「ふれあいランドでボーがわたしの方を見つめて、とてもかわいかったです。わたしは天国に行つてほしいです。」

飼育委員は、老いの兆候の見られるチャボたちに、どう接したらよいかを考えながら世話をしていた。委員会の日誌には、次のような記述がみられた。「寒いのかだんだん動きが鈍くなってきた。」「チャボやウサギの防寒のために、毛布やいらなくなったバスタオルなどを寄付してくれるように、給食時間

に



ふれあい活動：動きの弱ったチャボに寒いのかと洋服をかけて



ふれあい活動：老いたチャボと優しく接する飼育委員

放送したら、たくさん集まった。寒さを少しでも防げるように、飼育舎にカバーをつけた。」

飼育委員は、最初は自分達が動物と接したという気持ちが強かったけれど、だんだんに老いていくチャボやウサギの立場に立って、世話の仕方や飼育舎の環境を考えたり、他の児童たちにも接し方を教えたりできるようになった。

学校飼育動物が小さくてかわいらしく、また生きる力にあふれている「生」の時は、楽しく一緒に遊び、「老」「病」の時には、寄り添い

「死」を迎える時は、見守ることによって、生命の神秘さに触れ生物を愛護しようとする態度が育まれてくることを実感してきた。

4 おわりに

2004年に佐世保市の小6女兒が同級生をカッターナイフで殺傷するという痛ましい事件がおきた。加害者・被害者双方とも小学生であったという事件の特異性から長崎県教育委員会は事件の翌年、県内の小中学生を対象に「生と死のイメージ」に対する意識調査を実施した。

「死んだ人が生き返ると思いますか」との問いに「はい」と回答した児童・生徒が小学4年生 14.7%、小学6年生 13.1%、中学2年生で 18.5%にのぼったと発表された。小・中学生の保護者や、教育関係者は少なからず衝撃を受け、その後の講演会や学習会でこの数字が取り上げられることがたびたびあった。小学生がカッターで人を殺傷するというほどの動機が大人たちには想像できず、大人たちの考える「死生観」と違った感覚が児童にあるのかもしれないと考えたからであろう。

「死んだ人が生き返る」そのように思う理由について「ゲームでリセットできるから」と答えた児童・生徒が7.2%いたことで、バーチャル・リアリティーのゲームを批判する意見も多く聞かれたと記憶する。

しかし、それだけがこのような死生観を生み出した原因ではないと思う。児童・生徒が「生・老・病・死」の「死」について特に切り離された生活をしていることが大きな問題ではないだろうか。

「生・老・病」の先には「死」があることを自然に学ぶことのできる学校飼育動物の更なる活用を推進することが極めて重要である。

(福岡雙葉小学校教諭 [元 福岡市立飯倉中央小学校])